

皆さま

猛暑お見舞い申し上げます。
その 16 をお届けいたします。

現在こちら時間 8 月 11 日(日)午後 3 時過ぎ、パソコン情報では今日の東京の「最低」気温が31度と
のこと。ビックリしました。こちらは数年ぶりの猛暑だった短い夏も終わり、秋の気配濃厚です。ジャケッ
トは必須ですし、夜は 10 度を切ることも多くなりました。欧州の大陸はまだ暑いようです。

所用で短期間東京に戻り、帰ってきて学生の採点作業。やっと終えて、明日と明後日は学生の夏期語
学校の視察です。Bristol と Plymouth に行ってきます。校長先生は夏も結構忙しいのです。
Plymouth はピルグリム・ファーザーズ出航の地ですが、何か偲ぶものがあるのでしょうか。

増淵 文規

英国ダラム便り (その 16)

[EU なんかどうでもよい]

どこの国でも庶民は国際問題には関心がありませんが、欧州大陸のドイツやフ
ランスの国民なら EU の一員であることだけは嫌でも意識させられます。毎日ユ
ーロを使っていますし、隣国との国境からフリーに外国人が入ってきます。英
国にはこれがないから EU を感じるものが少ないんだと思います。何がメリット
なのかについての国民的コンセンサスは存在しないと言ってよいでしょう。政
治やマスコミの先導で EU 脱退世論を作ることは簡単です。そうはならないと信
じていますが、2015年の総選挙で保守連立が勝利すれば、
EU 残留是非の国民投票を行うことをキャメロン首相は公約しています。ユーロ
通貨に加盟せず、国境通行の自由を定めるシェンゲン条約にも加盟していない

英国は EU の他の主要国から見れば異端児です。この二つについては今後とも独自のスタンスを貫くでしょう。この他にも社会民主主義的政策への反対、EU 官僚肥大化への嫌悪など英国が EU での独仏リーダーシップについて行けない点が少なからず存在します。EU との距離はかなり大きく見えますが、そもそも EU に対する期待感が独仏とは違うのではないかと思えます。

ドゴールに邪魔されながら英国が必死に EU 加盟を目指したのはあくまで「物の移動の自由」すなわち関税・非関税障壁の無い Free Market でしたし、今でも英国にとり重要なのは投資も含めた Free Market です。キャメロンの EU 関連演説で必ず出てくる言葉です。英国経済にとり欧州全体が Free Market になることは意義が大きいからです。EFTA(European Free Trade Association)という懐かしい言葉があります。うまく機能しませんでした。当時の EC に対抗して英国の音頭でできた FTA のはしりです。結局英国人の発想は当時とあまり変わっていないのではないのでしょうか。自由な取引さえできれば良いということでしょう。1987年の欧州単一市場の成立で、英国の目的は達せられました。そこで止まらず EU は独仏主導でドンドン地域統合の程度が深くなっていく。通貨統合だとか、共通外交政策だとか、欧州大統領構想とか。英国人からすれば「ちょっと待ってよ。それはやり過ぎ」ということではないのでしょうか。英国は EU にそこまで期待していなかったし、EU に自国主権の一部を委ねるようなことはしたくないのだと思います。

悪名高い EU の農業政策でも、英国は常に強烈な反逆者でした。90年代までは

EU 予算の半分以上は農業関係でした。農作物への補助金です。EU は色々立派な事を言いますが、今でも予算の 40% 近くは農業補助金です。80 年代パリに滞在していた時、良くスーパーで EC (EU) 放出バターの投げ売りがあって、時々買ってました。会社のフランス人同僚から「何年前のバターだかわからないから買わない方が良い」と言われたものです。補助金があって政府が買い上げてくれるから、農民はせっせと農畜産物の増産に励み、大量の在庫を抱えることになったわけです。一部は輸出に回すわけですから、ひどい話です、政府の補助金付きの農産物輸出。日本の農業保護は守るだけのものであって、輸出に補助金などつけません。EU の農業保護は日本よりたちが悪いと私は思っていますが、EU 官僚の頭が良いせいか、世界であまり強く非難されないようです。EU の農業保護の最大受益国はもちろんフランスです。英国は EU への拠出金はフランスと似たようなものですが、農業ポーションが小さいから補助金受取額が小さい。完全にダシ前状態になっていました。ここで黙っていないのが英国のすごいところ。あのサッチャーさんが怒りまくります。「フランスだけが得をしておかしい。農業補助金受け取の少ない英国には還付金をよこせ」とねじ込み、これを通してしまった。1984 年のことで、「英国リベート (還付金)」と呼ばれるものです。英国の主張はその通りではありますが、そういう事情も知りながら、遅れて 1973 年にこのこ加盟して、今度は「今の制度がおかしい」と喚いたわけです。どういう理由でサッチャー・リベートが成立してしまったのかわかりませんが、このリベートは相当の額で英国にとって重要です。EU の中期予算のたびに英国リベートは削られていく運命にあります。農業補助金予算も削られているので、英国もしぶしぶ従ってはいますが、それ以上は譲れな

いという一線があるはずです。英国だけへの還付金ですから、英国以外の EU 諸国は間違いなくこの制度を廃止したがつているでしょう。全く利害が反します。

「英国の言い分を聞かないと EU を脱退しちゃうかもよ」と言って脅しをかけているのですが、ドイツやフランスは最近あまり英国を相手にしなくなっていると言われます。EU もクロアチアが加盟して 28 カ国。すっかり国際的に定着したから、「英国が脱退したければどうぞ」と言われかねません。ただ英国が抜けたら EU は持たないでしょう。EU なんか関係ないと思っている英国民を政治がきちんと導いて欲しいところです。

[景気回復期待]

ここ 3 年ほど英国の景気は良くありません。四半期ベースでマイナス成長というのも何回もありましたが、今年の前半はまずまずで景気回復期待が強まっています。最近のジャーナリズムでは「ロイヤル・ベビー誕生」と「英国人のウインブルドン優勝」が英国経済の心理的プラス効果だと報じています。そうであってほしいという「期待」ですが、どうでしょうか。去年は女王 60 周年とロンドンオリンピックで大いに盛り上がりましたが、経済は落ち込んだままでした。日本と違って財政赤字に神経質な国で、思いきった景気刺激策が取れないだけに、心理的効果だけでは景気は動かないと思います。

2013年8月8日

